



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	中学校家庭科における保育・家族学習の授業と生徒の学び：家庭科における「人との関係性」の育成の視点から(審査結果の要旨)
Author(s)	鎌野,育代
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	http://hdl.handle.net/2309/139090
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、中学校家庭科の保育・家族の授業における人間関係に関する生徒の学びについて、「人との関係性」という概念を用いて探求するものである。現在、日本では子どもに限らず大人にあっても、人間関係の希薄化は問題視されている。この今日的な問題に対し、学校教育として、また、家庭科教育として、どのように取り組んでいけばいいのかを明らかにした本研究の意義は明確である。特に、家庭科教育研究において、従来は、家族学習と保育学習は別の領域・分野として取り扱われていたが、本研究では、「人との関係性」という概念で捉えた際に共通する側面に焦点化することにより、教育実践への貢献度の高い知見を得ようとしている点に、本研究の目的の独自性が現れていると考える。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論では、5つの調査を実施している。調査1では、中学生の「人との関係性」という視点からの発達段階を捉えるために、小・中・高・大学生を対象とした質問紙調査と焦点化された設問に関する面接調査から分析・考察をおこなっている。調査2は、中学校保育・家族学習におけるロール・プレイングにおける生徒の学びを捉えるために、分析し考察した。調査3は、家族学習を実践し、学習後の自由記述をデータとして、ロール・プレイングによる中学生の「人との関係性」の変容プロセスをM-GTAを用いて読み取っている。調査4では、保育体験学習と「人との関係性」の育成との関係を検討するために、中学生の幼児へのイメージと自己効力感の変化を指標として、中学校3年生を対象に一年間の保育学習に取り組んだ生徒への質問紙調査をもとに考察した。調査5では、3回の保育体験学習を実施した生徒を対象とするインタビュー調査を実施し、M-GTAにより考察した。つまり、先行研究・関連資料を網羅的に整理した上で、量的なデータ収集と分析と、質的データの収集と分析を効果的に組み合わせ、研究を展開している。このことにより、妥当性・信頼性を備えた知見を得ることを実現しており、教育研究の方法論の展望を開く試みとして高く評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文では、家庭科教育の中での「人との関係性」の位置づけのために、先行研究の動向について丁寧に分析・考察している。また、ケアリング理論に関しては、この概念の隣接領域である看護分野も含めた膨大な数の資料収集により、読み応えのある内容となっており、本研究の学問上の位置づけが明確になっている。本研究のデータの収集と分析に関しては、調査1で「人との関係性」から捉えた中学生の発達段階の特徴を明確にしたことは、続く調査におけるデータ収集と分析の方向付けをするための重要な意義が認められる。調査2・3ではロール・プレイングを用いて、調査4・5では保育体験学習を通じた中学生たちの学びのプロセスや教育的効果を、量的なデータ収集と分析と質的データの収集と分析を実施することにより、順次的探索的に研究を進めている。これらの豊富なデータ収集と的確な分析手法の選択により、教育実践研究として、意義深い知見を生み出すことに成功しており、その教育的意義が高く評価された。同時に、家庭科の保育・家族学習の今後の研究にも示唆に富んだ成果を示したと捉えられる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文は、豊富な文献・資料収集と多角的な5つの調査で得られた知見を集約して総括的に検討した結果、以下の二つの学術的な知見を得ている。一つは、ロール・プレイングに関する分析から、人間関係学として確立されている理論に、実証的・教育的実践的知見から新たなエビデンスを見出したことである。家族・保育学習におけるロール・プレイングを通して、人間関係学の行為の原理の3段階、すなわち情緒（他者の立場に立ち、感情が動く）⇒②認識（自分と他者との間で、かかわり合っていることに気付く）⇒③行為（いい関係になるためのふるまいを考える）という理論を、本研究から得られた知見から検証できた。もう一つは、ケアリング理論の「受容性」⇒「応答」⇒「専心没頭」⇒「動機の転移」という過程を、具体的な中学生の記述から読み取ったエビデンスと結びつけており、理論と実践の双方向から「人との関係性」の育成に関する教育的効果を明示している。これらの本研究の成果は、関連する学問領域への貴重な示唆になると考えられ、高い学術的な水準に達していると評価できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文では、家庭科の保育・家族学習の中での実践的な学びや、体験を通しての学びの教育的効果の実証に向けて意欲的に取り組んでおり、その社会的意義は高い。また、関連分野の先行研究・資料を網羅して集約し、用語の定義を確立し、独創的な視点の理論的基盤を確保している。この理論基盤の上に、教育実践と深く関連した調査をおこなったことで、学術的汎化性の高い、かつ、教育実践研究としての有益性の高い研究となっている。この両面を兼ね備えた教育研究は希少であり、意義深いと考える。本研究の成果は、家庭科教育のみならず、ロール・プレイングの理論を生み出した社会心理学や、ケアリング理論と深く関わっている教育哲学の学問領域にとって貴重な研究成果を導くことができたと考えられ、波及効果が期待できる。よって、博士（教育学）の学位取得にふさわしいと判断された。

以上のことから、研究の目的の意義や独創性、研究方法の妥当性、研究資料やデータの収集と分析の適切さ、研究の考察と結論の妥当性と学術的な水準および取得学位にふさわしい意義や成果という学位論文審査基準の5項目をすべて満たしており、無記名で投票を行った結果、審査委員全員が一致して、博士（教育学）の論文として合格であると認定した。